令和７年度

全国学力・学習状況調査

恵那市の状況

SDGs未来都市 恵那市

恵那市教育研究所

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における小学校国語の結果分析

恵那市教育研究所

調査結果

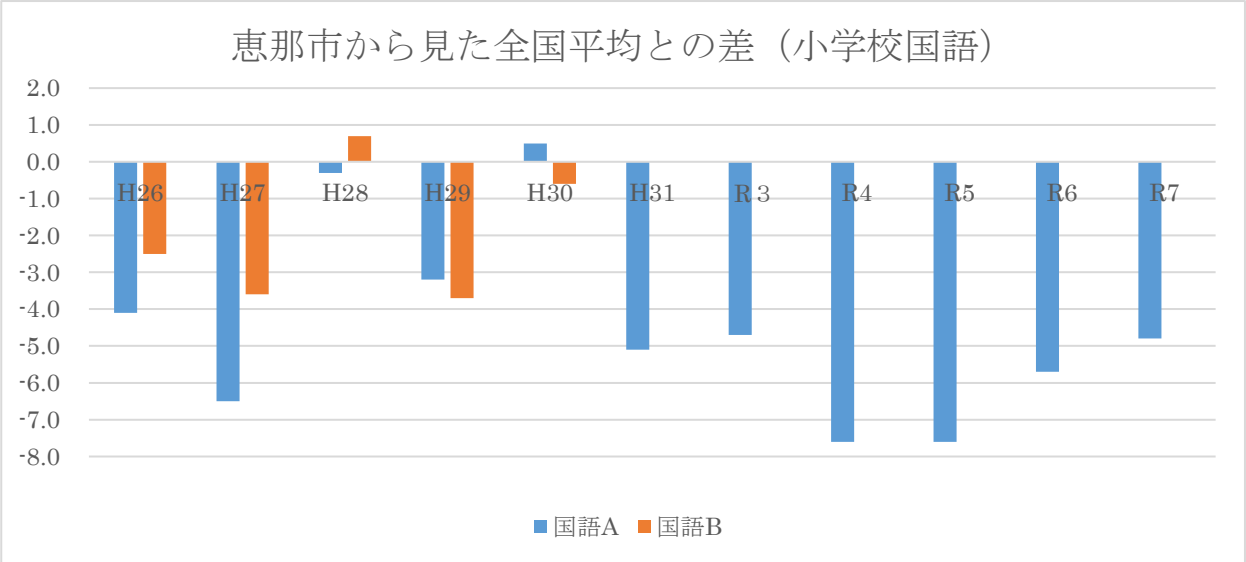
■　平均正答率

- 恵那市　　６２％
- 県　　６５％
- 全国　　６６．８％【恵那市から見た国との差　−4.8】

■　集計結果

分類		区分	対象問題数（問）	平均正答率（%）		
				貴教育委員会	岐阜県（公立）	全国（公立）
全体			14	62	65	66.8
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	70.8	73.4	76.9
		(2) 情報の扱い方に関する事項	1	58.5	62.5	63.1
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	79.5	79.9	81.2
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	3	63.5	65.8	66.3
		B　書くこと	3	64.8	67.9	69.5
		C　読むこと	4	51.7	55.9	57.5
評価の観点		知識・技能	4	69.9	72.3	74.5
		思考・判断・表現	10	59.2	62.5	63.8
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	61.6	63.9	64.7
		短答式	3	73.1	75.8	78.5
		記述式	2	48.5	56.1	58.8

■　調査結果の概要



県及び全国との平均正答率を比較すると、県からは３ポイント、全国からは 4.8 ポイント下回っています。

学習指導要領の内容別では特に、「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」や、「思考力、判断力、表現力等」の「C　読むこと」において課題が見られました。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

知識及び技能　（１）言葉の特徴や使い方に関する事項

2四　ア、イ　　恵那市の平均正答率　ア **74.0%**（全国：81.6%）　イ **67.5%**（全国：72.1%）

学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_shou_kokugo.pdf

■　解答の傾向について

2四は、傍線部を漢字を使って書き直す問題です。設問アは「このみ（好み）」という漢字を書く問題ですが、本市の正答率は74.0%で、全国平均を7.6ポイント下回っています。同様に設問イは「あつい（暑い）日」を書く問題で正答率は67.5%であり、全国平均を4.6ポイント下回っています。

学習した漢字を正しく書くというところに課題があることが分かります。

■　学習指導に当たって

『学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う』

漢字を学習する際には、成り立ちや意味を考え、理解しながら学習すると、漢字の習熟に役立ちます。また、熟語として使われるときに、どのように使われるかを考えながら覚えることも大切です。さらに、生活ノートや授業のまとめなど、一定の分量の文章を継続して書く機会でも、学習した漢字を用いて書く習慣を身に付けると、漢字を忘れにくくなります。昨今、一人一台端末が導入されたことにより、これまで紙のノートに手書きで書いていたものをタブレットに入力する形でまとめる機会も増えました。紙のノートに書く機会が減りつつある今だからこそ、手書きをする機会を精選したり、手書きとタブレットでの練習を組み合わせたりして、反復練習する機会を確保することも必要です。

この学習指導の工夫は昨年度も提案した方法です。このような取組を継続する中で、正しく漢字を使う力は伸びてきていると考えられます。引き続き継続した取組がさらに力を伸ばしていきます。

漢字の成り立ちを理解しながら書くと、覚えやすいね。

熟語にした時にどう使うかを知ると、どういうときに使うかが分かりやすいね。

習った漢字は、授業でまとめを書くときや、生活ノートを書く時にも、面倒がらずに使うことで、漢字を使う習慣が身に付くね。

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

思考力、判断力、表現力等　　C 読むこと

3三（2）　恵那市の平均正答率　**45.3%**（全国：56.3%）

目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_shou_kokugo.pdf

■　解答の傾向について

問題形式が記述式で正答率が45.3%である3三（2）は、複数の資料を根拠に「言葉の変化」について学ぶ場面において、登場人物の立場で自分の考えをまとめる問題です。

正答率の全国平均との差が11.0ポイント、県平均との差が8.6ポイントとなっています。以下は回答の類型ごとの割合と正答の条件です。

問題番号	問題の概要	解答類型									
			1	2	3	4	5	6	7	8	9 9	無解答
3 三 （2）	【資料１】を読み返して言葉の変化について自分が納得したことを、【資料２】、【資料３】、【資料４】に書かれていることを理由にしてまとめて書く	市	**27.5**	**8.5**	**9.4**	9.9	10.2				9.9	24.6
		県	**34.2**	**10.1**	**9.6**	10.1	10.4				7.7	17.9
		全国	**36.2**	**10.1**	**10.0**	9.9	10.3				7.3	16.2

（正答の条件）
次の条件を満たして解答している。
① 言葉の変化について納得したことを【資料１】から言葉や文を取り上げてている。
② 納得した理由を【資料２】、【資料３】、【資料４】の中から選び、以下のように言葉や文を取り上げて書いている。
a　【資料２】、【資料３】のいずれかから言葉や取り上げて理由を書いている。
b　【資料４】から言葉や文を取り上げて理由を書いている。
c　【資料２】、【資料３】、【資料４】のうち複数の資料から言葉や文を取り上げて理由を書いている。

1◎	条件①、②を満たしているもののうち、条件②については、ａを書いているもの
2◎	条件①、②を満たしているもののうち、条件②については、ｂをかいているもの
3◎	条件①、②を満たしているもののうち、条件②については、ｃをかいているもの
4	条件①は満たしているが、条件②は満たしていないもの
5	条件②は満たしているが、条件①は満たしていないもの
99	上記以外のもの
0	無回答

これらの結果を見ると全国や県の解答傾向と比較して、「無回答」や「類型外」の解答が合計34.5%と多くなっています。逆に正答者の解答傾向や解答類型にある誤答者の割合には大きな差がありません。このことから、誤答者は問題の意図を正しく理解できていなかったことが考えられます。

学習指導要領の指導事項である「目的に応じて、必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりする」が問われています。

■　学習指導に当たって

『目的に応じて、必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりする』

これまでの授業実践をとおして、自分の考えをもったり、説得力をもたせるために必要な情報を見つけたり、それらを自分の考えにまとめる力が育ちつつあることが分かりました。今回の問題では、このような力に加えて「あなたが木村さんなら」という条件（目的）を踏まえて論を展開する力が課題だったと言えます。

今後の指導に当たっては、自分の意見を表す文章を書く活動を行った後などに交流の時間を位置付け、仲間の伝えたいことがより伝わるようにするための改善策について考えるなど、仲間の目的に応じた資料や論の進め方について考える場面をもつことが考えられます。そうすることで自分とは異なる立場（目的）に合わせて論を進める力が身に付いていくと考えられます。

自分の意見を表す文章を書く活動を行った後に、仲間の伝えたいことがより伝わるようにするための改善策について考えるなど、仲間の目的に応じた資料や論の進め方について考える場面をもつことで、自分とは異なる立場（目的）に合わせて論を進める力が身に付いていきますよ。

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における小学校算数の結果分析

恵那市教育研究所

調査結果

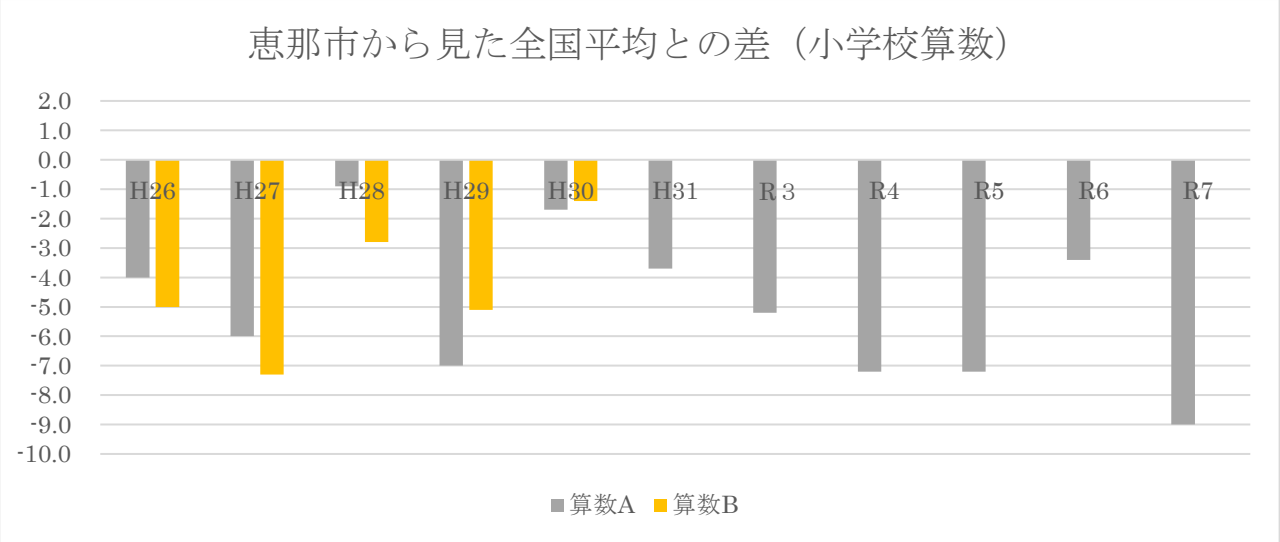
■　平均正答率

- 恵那市　　４９％
- 県　　５６％
- 全国　　５８.０％【恵那市から見た国との差　－9.0】

■　集計結果

分類	区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	岐阜県（公立）	全国（公立）
全体		16	49	56	58.0
学習指導要領の領域	A　数と計算	8	55.0	60.3	62.3
	B　図形	4	42.7	54.1	56.2
	C　測定	2	46.6	54.0	54.8
	C　変化と関係	3	49.6	54.4	57.5
	D　データの活用	5	55.7	60.7	62.6
評価の観点	知識・技能	9	56.6	64.1	65.5
	思考・判断・表現	7	39.4	45.7	48.3
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	6	58.3	65.0	67.2
	短答式	6	55.9	62.7	64.0
	記述式	4	25.0	32.6	34.9

■　調査結果の概要



算数において恵那市では、調査開始以来、県及び全国の平均正答率を下回る結果が続いています。学習指導要領の領域別に見ると「B　図形」が、県及び全国の平均正答率と最も開きがあり、正答率が低い結果となっています。また、選択式や短答式に比べ、記述式の問題の正答率が、県及び全国の平均正答率と最も開きがあります。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

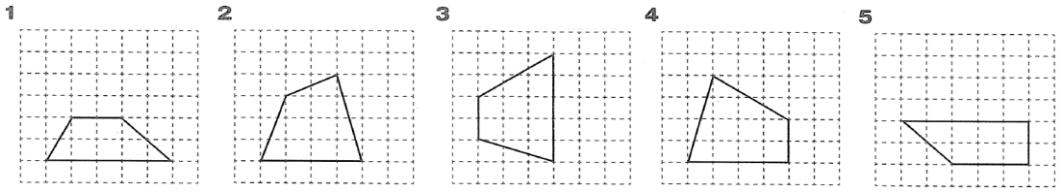
課題の見られた問題の概要

2（2）　恵那市の平均正答率 **30.4%**（全国：50.2%）

B　図形　　知識・技能

台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる問題

わかなさんは、方眼紙に下の１から５までの四角形をかきました。
下の１から５までの中で、台形はどれですか。
３つ選んで、その番号を書きましょう。



☞設問の詳細はこちらでご確認ください。
https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_shou_sansuu.pdf

問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
2	(2)	1	１、３、５と解答しているもの	◎	30.4	45.7	50.2
		2	１、２、３と解答しているもの １、３、４と解答しているもの １、３のみを回答しているもの		32.7	26.6	27.1
		3	１、２、５と解答しているもの １、４、５と解答しているもの １、５のみを解答しているもの		2.6	1.2	1.2
		4	２、３、５と解答しているもの ３、４、５と解答しているもの ３、５のみを解答しているもの		0.6	0.9	1.0
		5	１のみを解答しているもの		0.0	0.0	0.0
		6	１、２、４と解答しているもの １、２のみを解答しているもの １、４のみを解答しているもの		15.8	10.2	8.7
		99	上記以外の解答		16.7	14.4	11.1
		0	無解答		1.2	1.0	0.7

■ 解答の傾向について

「B　図形」領域の問題で正答率が 30.4%である 2 （２）は、全国平均との差が 19.8 ポイント、県平均との差が 15.3 ポイントで、本市と全国、県との平均の差が最も大きい問題です。

５つの図形の中から３つ台形を選ぶ選択問題です。小学校では、４年生で「向かい合った１組の辺が平行な四角形を、台形といいます」と学習しています。恵那市の児童が選んだ解答を分析してみると、１を選ぶことはできていたものの、３または５を選ぶことのできなかった児童が約７割いました。３のように１を回転させたような台形や２つの角が 90° である台形を台形だと正しく理解できていないことが要因であると考えられます。

■ 学習指導に当たって

新しい定義や定理、性質を学習する時には、その具体例をいくつも扱ったり、実際にその定義や定理、性質を使った問題に取り組んだりすることが大切です。

特に、図形領域において新たな図形を学習する際には、教科書に記載されているような「最も整った形」だけでなく、向き（角度）を変えて示す、ひっくり返して示す、少し条件を変えて示して、それが該当の図形といえるか問うなどすることで、図と定義を一致させ、正しく認識できるようにしていきましょう。

指導改善のポイント

■ 課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

3(2) 恵那市の平均正答率 **14.9%** （全国：23.0%）

A 数と計算　思考・判断・表現

分数の加法について、共通する単位分数を見いだし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる

（～略～）

$\frac{2}{5}+\frac{1}{5}$ は、もとにする数を$\frac{1}{5}$にすると、整数のたし算を使って計算することができます。

（～略～）

$\frac{3}{4}+\frac{2}{3}$についても、もとにする数を同じ数にして考えることができます。

もとにする数を同じ数にするとき、その数は何になりますか。その数を書きましょう。また、$\frac{3}{4}$はその数の何個分、$\frac{2}{3}$はその数の何個分ですか。数や言葉を使って書きましょう。

（正答の条件）

次の①、②、③の全てを書いている。

① $\frac{3}{4}$と$\frac{2}{3}$に共通する単位分数が、$\frac{1}{12}$であることを表す数や言葉（分母が 12 の倍数の単位分数を含む）

② $\frac{3}{4}$が共通する単位分数の幾つ分かを表す数や言葉

③ $\frac{2}{3}$が共通する単位分数の幾つ分かを表す数や言葉

問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
3	(2)	1	①、②、③の全てを書いているもの	◎	14.9	22.7	23.0
		2	②、③を書いているもの		0.0	0.2	0.3
		3	①、②を書いているもの ①、③を書いているもの		0.0	0.5	0.5
		4	①を書いているもの		4.4	6.1	6.1
		5	②を書いているもの ③を書いているもの		0.6	1.0	1.0
		6	通分について書いているもの		27.5	24.8	26.2
		7	$\frac{3}{4}$は$\frac{1}{4}$の３個分であることと、$\frac{2}{3}$は$\frac{1}{3}$の２個分であることの両方、またはどちらか一方を書いているもの		5.0	5.3	4.4
		99	上記以外の解答		24.9	22.3	22.8
		0	無解答		22.8	17.3	15.7

■ 解答の傾向について

「A　数と計算」領域の記述式で解答する問題で、正答率が 14.9%である 3 （2）は、全国平均との差が 8.1 ポイント、県平均との差が 7.8 ポイントで、今回の調査の中で最も正答率が低い問題です。

異分母の分数の加法を計算する際、もとにする数が幾つになるのか、また、加数と被加数は、もとにする数の幾つ分かを数や言葉を用いて書く問題です。誤答として、もとにする数のことではなく通分について書かれているものが 27.5%、見当違いの記述が 24.9%で、無解答が 22.8%でした。「異分母の分数の加法の計算は、通分して分母をそろえ分子を足す」という形式的な知識・技能に留まっており、なぜそのように計算できるのか、単位分数の個数に着目して考えることができていないことが要因であると考えられます。

また、この問題は、問題文の記述が長く何を問われているのかが理解できなかったために、無解答率が高くなったと考えられます。

■ 学習指導に当たって

単位をそろえて計算することは、加法や減法の計算の基本となる考え方です。異分母の加法は小学校５年生で学習する内容ですが、これまでにも 10 が幾つ分、100 が幾つ分、0.1 が幾つ分と、異分母の加法と同じように、もとにする数を同じにして計算することを学習します。加法や減法の指導では、もとにする数が何であるのかを問い返し、その幾つ分になるのかを考えることが大切です。また、今回の結果を見ると、もとにする数という言葉の意味が分かっていない児童が見受けられることから、普段の授業から「もとにする数」「幾つ分」について児童が説明する時間を確保することを心がけましょう。

さらに、今回の結果を分析してみると、全体の傾向として、問題文章の長い問題で特に正答率が低くなっています。改めて、日頃の授業の中で児童が自分で問題を読み、問題文に線を引いたり自ら図や表等に表したりしながら問題を把握し、何を問われているのかを判断する時間を確保しましょう。

また、「算数に関わる児童質問」において「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか」の項目で、全国・県より低くなっています。授業終末に振り返りを書かせる中で、「授業で学んだことを次に生かす」視点を大切にしている学校が多くあります。「次の授業」だけでなく「日常生活」の中でどんなことに生かせそうかを考えるような振り返りを大切にしましょう。

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における小学校理科の結果分析

恵那市教育研究所

調査結果

■　平均正答率

- 恵那市　　５１％
- 県　　５６％
- 全国　　５７．１％【恵那市から見た国との差　－6.1】

■　集計結果

分類		区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
				貴教育委員会	岐阜県（公立）	全国（公立）
全体			17	51	56	57.1
学習指導要領の区分・領域	A区分	「エネルギー」を柱とする領域	4	40.2	45.6	46.7
		「粒子」を柱とする領域	6	47.4	49.9	51.4
	B区分	「生命」を柱とする領域	4	45.0	49.5	52.0
		「地球」を柱とする領域	6	61.2	65.8	66.7
評価の観点		知識・技能	8	49.7	53.8	55.3
		思考・判断・表現	9	52.9	57.4	58.7
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	11	49.6	53.7	54.7
		短答式	4	63.1	67.4	69.7
		記述式	2	37.4	43.7	45.2

■　調査結果の概要

理科において恵那市では、県及び全国の平均正答率を下回っています。学習指導要領の領域別に見ると「Ｂ区分　「生命」を柱とする領域」が、県及び全国の平均正答率と最も開きがあります。また、「Ａ区分　「エネルギー」を柱とする領域」で、最も正答率が低い結果となっています。また、選択式や短答式に比べ、記述式の問題の正答率が、県及び全国の平均正答率と最も開きがあり、最も正答率が低くなっています。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

4（2）　恵那市の平均正答率 **45.7%**（全国：57.5%）

Ａ区分　「粒子」を柱とする領域　知識・技能
Ｂ区分　「地球」を柱とする領域　知識・技能

水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる

図の（イ）から（オ）の中にあてはまるものを、下の１から 12 の中からそれぞれ１つ選んで、その番号を書きましょう。

Ｄ（氷水の入ったコップの表面）で、（ウ　水蒸気）は（エ）て、（オ）になっている。

（エ）
7　蒸発し
8　温められ
9　冷やされ

（オ）
10　水蒸気
11　液体の水
12　氷

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_shou_rika.pdf

問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
4	(2)	1	（エ）７（オ）10 と解答しているもの		4.7	4.4	3.7
		2	（エ）７（オ）11 と解答しているもの		3.6	3.3	3.0
		3	（エ）７（オ）12 と解答しているもの		0.3	0.7	0.6
		4	（エ）８（オ）10 と解答しているもの		3.0	4.1	3.6
		5	（エ）８（オ）11 と解答しているもの		10.7	8.2	7.0
		6	（エ）８（オ）12 と解答しているもの		1.2	1.0	0.8
		7	（エ）９（オ）10 と解答しているもの		12.5	8.3	8.1
		8	（エ）９（オ）11 と解答しているもの	◎	45.7	53.7	57.5
		9	（エ）９（オ）12 と解答しているもの		11.3	9.2	8.5
		99	上記以外の解答		6.8	5.1	5.7
		0	無解答		0.3	2.0	1.5

■ 解答の傾向について

Ａ区分「粒子」を柱とする領域とＢ区分「地球」を柱とする領域にまたいだ問題で、正答率が 45.7%である4（２）は、全国平均との差が 11.8 ポイント、県平均との差が 8.0 ポイントで、本市と全国、県との平均の差が最も大きい問題です。

水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ問題です。小学校４年生で、水が水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくことや、空気中の水蒸気は、結露して再び水になって現れることがあることを気温と関連付けて学習しています。恵那市の児童が選んだ解答を分析してみると、氷の入ったコップの表面に触れることで（エ）は９「冷やされ」ることは、理解しているものの、（オ）の解答であるコップの表面でどのような水の変化が起きるのか捉えきれていないことが要因であると考えられます。

■ 学習指導に当たって

本問題の前に、「湯気が（イ）蒸発し、（ウ）水蒸気になっている。」という問題があり、この正答率は、国の平均正答率よりも 1.1 ポイント高くなっています。つまり、水を温めた場合の知識は十分付いているが、水を冷やした場合の水の変化について丁寧に扱うことが大切です。

教科書では、校舎の内外で、氷水の入ったガラス瓶の表面を観察する実験が取り上げられています。実際に自分で実験したこととその結果を知識と結び付け、自分の言葉で説明できるようにさせることが大切です。イラスト等を使いながら、空気中の水蒸気が冷えて水滴になっているということを捉えさせ、それを言葉で説明するような時間を確保しましょう。また、結露をした教室のガラスなどを示し、この水の変化について、日常的に子供たちに捉えさせていきましょう。

指導改善のポイント

■ 課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

Ａ区分　「エネルギー」を柱とする領域
Ａ区分　「粒子」を柱とする領域　知識・技能

2（１）恵那市の平均正答率 **7.7%**（全国：10.6%）

身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる

アルミニウム、鉄、銅の性質について、下の１から４までの中からそれぞれ１つ選んで、その番号を書きましょう。同じ番号を選んでもかまいません。

１　電気を通し、磁石に引きつけられる。
２　電気を通し、磁石に引きつけられない。
３　電気を通さず、磁石に引きつけられる。
４　電気を通さず、磁石に引きつけられない。

問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
2	(1)	1	アルミニウム１、鉄１、銅１　と解答しているもの		0.9	0.6	0.5
		2	アルミニウム１、鉄１、銅２　と解答しているもの		1.8	2.3	2.3
		3	アルミニウム２、鉄１、銅１　と解答しているもの		3.3	3.3	3.6
		4	アルミニウム２、鉄１、銅２　と解答しているもの	◎	7.7	9.6	10.6
		5	鉄２　と解答しているもの		6.2	3.9	3.8
		6	アルミニウム、鉄、銅のいずれかに、３または４と解答しているもの		78.6	78.6	77.9
		99	上記以外の解答		0.6	0.9	0.7
		0	無解答		0.9	0.9	0.6

■ 解答の傾向について

Ａ区分「エネルギー」を柱とする領域とＡ区分「粒子」を柱とする領域にまたいだ問題で、正答率が 7.7%である 4（１）は、全国平均との差が 2.9 ポイント、県平均との差が 1.9 ポイントで、今回の調査の中で最も正答率が低い問題です。

アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるか、それぞれの性質に当てはまるものを選ぶ問題です。誤答として、６（アルミニウム、鉄、銅の少なく

とも１つは、電気を通さないと解答したもの）が 78.6%と、電気を通すかどうかの判断があいまいになっていることが要因であると考えられます。

■ 学習指導に当たって

小学校３年生では「電気の通り道と電気を通す物・通さない物」を学習し、乾電池、豆電球、導線を使って電気の働きを確かめます。ここで大切なのは、児童が身の回りの多様な物質に電気を通すかどうかを実験を通して確かめ、結果を基に物質の性質を整理する経験です。今回の調査では、アルミニウム、鉄、銅といった金属について誤答が多かったことから、児童が「金属は電気を通す」という共通性を十分に理解できていない可能性があります。

したがって、授業ではまず身近な生活場面と関連付け、アルミホイル、空き缶、10 円玉、釘などを使い、実際に豆電球が付くかどうかを確かめる活動が設定されています。その際、児童の実験結果を比較・共有し、アルミニウム、鉄、銅といった一見異なる物質も共通して電気を通すことに気付かせることが大切です。そして、「金属」というまとまりを実感をもって捉えさせることが重要です。

また、誤答が生じやすい背景には、「鉄は磁石につくが銅はつかない」といった経験から、金属の性質を混同したことが考えられます。そのため、磁石につくかどうかと電気を通すかどうかを区別して整理する場を設けることでより理解が深まります。

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における中学校国語の結果分析

恵那市教育研究所

調査結果

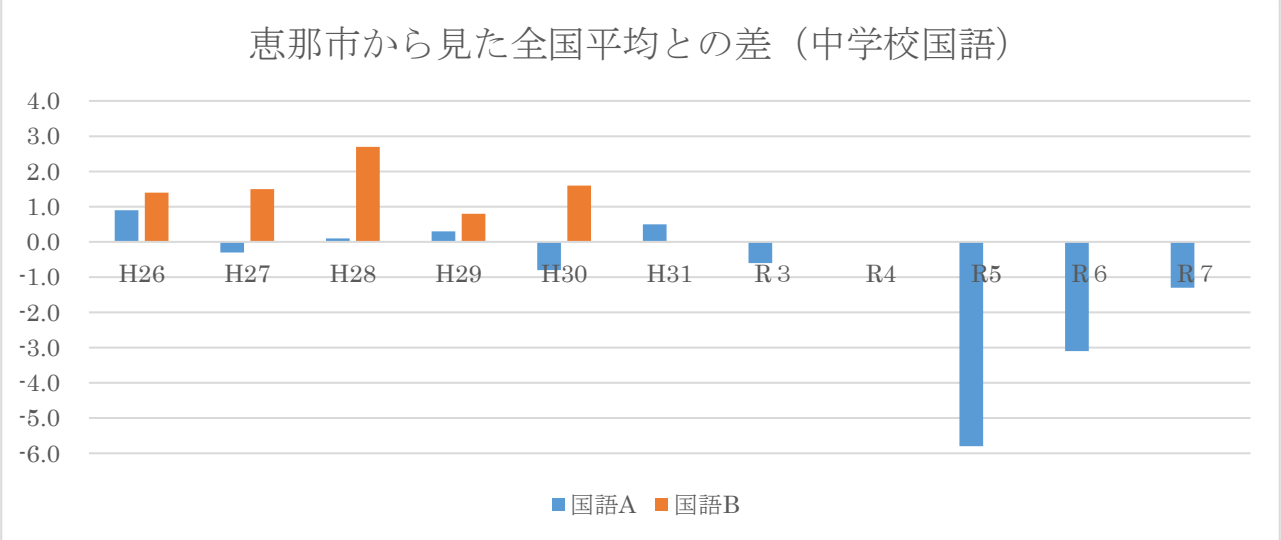
■　平均正答率

- 恵那市　　５３%
- 県　　５４%
- 全国　　５４．３%【恵那市から見た国との差　－1.3】

■　集計結果

分類		区分	対象問題数（問）	平均正答率(%) 貴教育委員会	岐阜県（公立）	全国（公立）
全体			14	53	54	54.3
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	45.9	46.2	48.1
		(2) 情報の扱い方に関する事項	0			
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	4	52.3	53.1	53.2
		B　書くこと	5	52.1	53.2	52.8
		C　読むこと	3	61.8	62.0	62.3
評価の観点		知識・技能	2	45.9	46.2	48.1
		思考・判断・表現	12	54.6	55.4	55.3
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	8	63.4	63.1	63.9
		短答式	2	69.3	72.0	73.6
		記述式	4	25.3	27.1	25.3

■　調査結果の概要



平均正答率の差を見ると、県との差はマイナス１ポイントで、全国との差はマイナス1.3ポイントであり、若干、全国、県の平均正答率を下回る結果となりました。ただし、小学校６年生の時の結果と比べると 6.3 ポイント差が小さくなっています。

全国、県との差が大きかった分類を見ると、学習指導要領の領域別、評価の観点別に見た「知識及び技能」の「言語の特徴や使い方に関する事項」と、問題形式で見た「短答式」において差が大きくなっています。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

1－一　恵那市の平均正答率 **31.1%**（全国：35.22%）

知識及び技能（１）言葉の特徴や使い方に関する事項

文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる問題。

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_chuu_kokugo.pdf

問題番号	問題の概要	解答類型									
			1◎	2	3	4	5	6	7	8	9 9	無解答
1一	変換した漢字として適切なものを選択する（かいしん）	市	**31.1**	33.3	35.6						0.0	0.0
		県	**33.4**	33.2	33.1						0.0	0.3
		全国	**35.2**	31.9	32.7						0.0	0.2

■　解答の傾向について

1一は、傍線部の「かいしん」という平仮名を漢字に変換するために、「会心」「改心」「改新」の中から適切な解答（会心）を選択する問題です。本市の正答率は31.1%で、全国平均を4.1ポイント下回っています。特に県や全国は正答者の割合が最も高いのに対して、恵那市では正答以外の「改心」や「改新」などの誤答者の方が割合が高くなっています。学習した漢字を熟語の意味や前後の文脈を踏まえて正しく選択するところに課題があることが分かります。

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

4－一　恵那市の平均正答率 **49.0%**（全国：57.3%）

思考力、判断力、表現力等　B　書くこと（短答式）

読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる問題。

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_chuu_kokugo.pdf

問題番号	問題の概要	解答類型									
			1	2	3	4	5	6	7	8	9 9	無解答
4一	手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する	市	**49.0**	5.3							7.3	38.4
		県	**54.3**	5.0							6.0	34.7
		全国	**57.3**	4.0							5.2	33.5

（正答の条件） 次の条件を満たして解答している。 ① 誤って書かれている漢字として、「問」を線で消している。 ② 正しい漢字として、「問」の右横に「門」と書いている。	
1◎	条件①、②を満たして解答している
2	条件①を満たし、条件②を満たさないで解答しているもの
99	上記以外のもの
0	無回答

■　解答の傾向について

三上さんが書いた「手紙の下書きの一部」について、問題文の表記方法を参考に、誤っている部分を修正する問題です。「誤っている漢字を見つけること」と「正しい漢字に直すこと」に加えて、問題文中の修正方法で記述する必要があります。恵那市は無回答率が高く、回答類型１に対する２の比率も高いことから、誤っている漢字を見つけられない割合、間違っていることに気付いても正しい漢字を想起できない割合の両方が高いといえます。

■　学習指導に当たって

『学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う』

今回、質問の内容、解答の仕方は違っていたものの、課題の見られた問題はいずれも漢字の知識に関わるものでした。漢字を学習する際には、成り立ちや意味を考えて、理解しながら学習すると、漢字の習熟に役立ちます。しかし、漢字の意味だけでは熟語の意味を想像することが難しいことがあります。

今回の1一の問題では「改心＝心を改める」「改新＝新しく改める」と漢字の意味から熟語の意味が想像できたものの「会心」については想像が難しかったと考えられます。熟語として使われるときには、どのような意味で、どのような場面で使われるかを考えながら覚えることが大切です。

また、4一の問題では、明確に「専問」という熟語の間違に気付き「専門」と直せる力が必要です。一人一台端末が導入されたことにより、漢字を選択して入力する場面が増えました。前後の文脈から当てはまらない選択肢を除外することで漢字を文の中で正しく使えることが多くなったことで、再認はできるけれども再生できない漢字が多くなっていることが考えられます。ノートや日記など日常的に紙に手書きをする場面を確保し、生活の中で漢字を使いながら再生することも大切です。

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における中学校数学の結果分析

恵那市教育研究所

調査結果

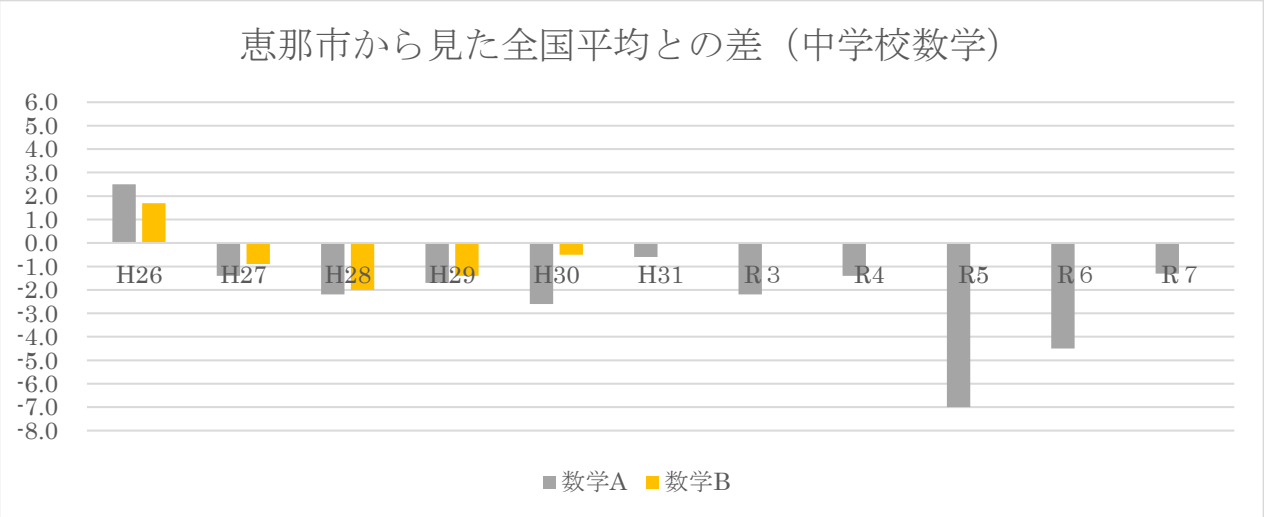
■　平均正答率

- 恵那市　　４７％
- 県　　５０％
- 全国　　４８．３％【恵那市から見た国との差　－１．３】

■　集計結果

分類	区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	岐阜県（公立）	全国（公立）
全体		15	47	50	48.3
学習指導要領の領域	A　数と式	5	41.0	43.0	43.5
	B　図形	4	46.3	49.7	46.5
	C　関数	3	47.3	49.6	48.2
	D　データの活用	3	59.2	60.3	58.6
評価の観点	知識・技能	9	53.8	55.7	54.4
	思考・判断・表現	6	37.6	40.4	39.1
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	3	52.2	53.3	54.0
	短答式	7	51.7	54.4	52.0
	記述式	5	38.3	40.6	39.6

■　調査結果の概要



数学において恵那市では、平成 27 年度から県及び全国の平均正答率を下回る結果が続いています。但し小学校６年生の時の結果と比較すると、5.9 ポイント差が小さくなっています。

学習指導要領の領域別に見ると「A　数と式」の正答率が、全国の平均正答率と最も開きがあります。一方で、「D　データの活用」の正答率では、全国の平均正答率を上回る結果となりました。評価の観点においては、「思考・判断・表現」の正答率が「知識・技能」の正答率に比べ、全国の平均正答率と差があります。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

1　　恵那市の平均正答率 **23.2%**（全国：31.8）　　A　数と式　知識・技能

素数の意味を理解しているかどうかをみる

下の１から９までの数の中から素数をすべて選び、選んだ数のマーク欄を黒く塗りつぶしなさい。

１　２　３　４　５　６　７　８　９

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_chuu_suugaku.pdf

問題番号	類型	解答	正答	恵那市	県	全国
	1	２、３、５、７と解答しているもの	◎	23.2	25.6	31.8
	2	３、５、７と解答しているもの		2.0	2.5	2.7
	3	２、３、５、７、９と解答しているもの		3.1	2.9	2.7
	4	１、２、３、５、７と解答しているもの		24.1	20.7	19.4
	5	１、３、５、７と解答しているもの		8.1	11.1	10.1
	6	１、３、５、７、９と解答しているもの		10.9	10.0	8.7
	7	上記４～６以外で、１を含んで解答しているもの		14.6	13.0	12.1
	99	上記以外の解答		13.2	13.5	12.0
	0	無解答		0.8	0.7	0.7

■　解答の傾向について

「A　式と式」領域の問題で正答率が 23.2%である1は、全国平均との差が 8.6 ポイント、県平均との差が 2.4 ポイントです。今回の調査において全国平均との差が最も大きい問題です。

１から９までの整数の中にある素数を全て答える問題です。誤答率の高い解答を見ると.解答において、「１、２、３、５、７」と答えているものが24.1%であり、正答よりも高くなっていることが分かります。また、それ以外に素数そのものの意味を正確に把握できていない数を選んでいる解答が50%ほどあります。中学校１年生の最初の単元の１時間目に学習する素数という数について、正しく覚えられていないことが要因であると考えられます。

■　学習指導に当たって

新しい定義や定理、性質を学習する時には、その具体例をいくつも扱ったり、実際にその定義や定理、性質を使った問題に取り組んだりすることが大切です。

中学校１年生では、「２や３のように、１とその数自身の積でしか表せない自然数を素数という。いいかえると、素数とは、１とその数自身のほかに約数がない数である。ただし、１は素数ではない。」と学習します。特に、自然数や約数など、定義の中に他の言葉が出てくる場合は、具体的な例を示しながら、生徒自身に素数か素数でないか判断するような問題を扱うことが大切です。

また、算数・数学は系統的に学ぶ学問であり、中学校１年生の最初に学習した内容でも、２年生や３年生でも素数を取り扱う問題が出題されます。素数に限らず、数学の言葉が問題文に記載されている時には、生徒に問い返しながら再度、言葉の定義や意味を確認するようにしましょう。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

6（２）　恵那市の平均正答率　**22.4%**（全国：25.7%）

Ａ　数と式　思考・判断・表現

式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見いだし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる

連続する２つの３の倍数の和は、９の倍数になるとは限らないことに気づいた二人は、連続する２つの３の倍数の和がどんな数になるかを調べることにしました。

そこで、二人は、ｎを整数として、連続する２つの３の倍数を３ｎ、３ｎ＋３と表してそれらの和を計算し、それぞれ次のように式を変形しました。

結菜さんの式の変形

３ｎ＋（３ｎ＋３）
＝３ｎ＋３ｎ＋３
＝６ｎ＋３
＝３（２ｎ＋１）

太一さんの式の変形

３ｎ＋（３ｎ＋３）
＝３ｎ＋３ｎ＋３
＝６ｎ＋３
＝２（３ｎ＋１）＋１

結菜さんの式の変形の３（２ｎ＋１）から、「連続する２つの３の倍数の和は、３の倍数である」ことがわかります。

太一さんの式の変形の２（３ｎ＋１）＋１から、連続する２つの３の倍数の和は、どんな数であるといえますか。「～～は、……である。」という形で書きなさい。

（正答の条件）
「○○は、◇◇である。」という形で、次の（a）、（b）について記述しているもの。
（a）○○が、「連続する２つの３の倍数の和」である。
（b）◇◇が、「奇数」である。

問題番号	類型	解答	正答	恵那市	県	全国
7 (2)	1	（a）（b）について記述しているもの	◎	9.8	14.4	12.3
	2	（a）についての記述が十分でなく、（b）について記述しているもの。又は、（b）のみを記述しているもの	○	1.7	1.7	1.4
	3	（a）について記述し、（b）以外で２（３ｎ＋１）＋１から読み取れる事柄を記述しているもの	◎	9.8	9.1	10.9
	4	上記３について、（a）についての記述が十分でないもの。又は、（a）についての記述がないもの	○	1.1	0.9	1.1

	5	上記１～４以外で、２（３ｎ＋１）＋１から読み取れないが、連続する二つの３の倍数の和について成り立つ事柄を記述しているもの（（a）についての記述が十分でないものや、（a）についての記述がないものを含む）		19.3	18.4	16.3
	6	成り立たない事柄を記述しているもの（（a）についての記述が十分でないものや、（a）についての記述がないものを含む）		10.4	9.7	11.5
	99	上記以外の解答		19.3	20.7	21.7
	0	無解答		28.6	25.0	24.9

■ 解答の傾向について

「A　式と式」領域の問題で正答率が 22.4%である6（２）は、全国平均との差が 3.3 ポイント、県平均との差が 3.8 ポイントで、今回の調査問題の中で最も正答率の低かった問題です。

中学校２年生の「数と式」領域では、文字を用いた式を使って、ある命題が成り立つことを説明する場面で、文字を用いて表現したり、文字を用いた式の意味を読み取ったり、計算したりする学習をします。この問題は、この学習の一部である文字を用いた式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見いだし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかに焦点をあてた問題です。

誤答を分析してみると、上記解答条件の(b)を書けていないもの（解答類型５、６）が29.7%であり、正答よりも高い数値となっています。結果である「２（３ｎ＋１）＋１が何を表しているのか理解できていないことが要因であると考えられます。また、無解答が28.6%と、命題が成り立つことを文字を使って説明する学習の理解が不十分であることが誤答の要因として考えられます。

■ 学習指導に当たって

中学校１年生の「数と式」領域で、数量や数量関係を文字で表すことを学習します。その際、文章からどのような式で表すことができるのかを考えるとともに、文字を使った式が何を表しているのかを考える問題に取り組むことが大切です。また、文字で考えることが苦手な生徒には、まずは具体的な数を代入し考えられるように支援しましょう。

中学校２年生の「数と式」領域で学習する命題が成り立つことを文字を使って説明する学習では、命題が成り立つことを説明する際、次のような活動が含まれています。例えば、「連続する２つに３の倍数の和は、奇数になる」を説明する際には、

① ２つの３つの３の倍数を３ｎ、３ｎ＋３と表す（ｎは整数)。
② それらの和３ｎ＋（３ｎ＋３）を計算し、その結果６ｎ＋３を２(３ｎ＋１)＋１の形の式に変形する。
③ ②で得られた式を２×(整数)＋１とみて、奇数を表していることを読み取る。
④ ③のことから、２つの奇数の和が奇数になるといえる。

上記の４つの活動を行い、説明を書き表します。

授業で行う際には、この４つの活動を意識し、誰がどの段階でつまずいているのかを把握し、それぞれの活動毎に、支援をすることが大切です。このような説明をする活動に生徒は慣れていません。何度も挑戦できるように、さまざまな問題を扱ったり、取り組む時間を確保したりする指導計画を立てるようにしましょう。

令和７年度　全国学力・学習状況調査

恵那市における中学校理科の結果分析

恵那市教育研究所

中学校理科はＣＢＴによる調査が行われ、全日程に共通する問題（６問）、実施日により異なる問題（16 問中４問）、非公開問題（16 問）の計 26 問がありました。そのうち国からは、全日程に共通する問題、実施日により異なる問題の合計 22 問について、問題、正答数、IRT スコア等の情報提供がありました。

※IRT とは、児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論のことです。

文部科学省　令和７年度全国学力・学習状況調査　「中学校理科」　結果返却のポイントより

調査結果

■　集計結果

【1】 平均正答数集計値　　全日程に共通する問題

	生徒数	平均正答数	標準偏差
恵那市教育委員会	349	2.8 / 6	1.4
岐阜県（公立）	15,241	3.2 / 6	1.4
全国（公立）	864,634	2.9 / 6	1.4

【2】～【9】 平均正答数集計値　　実施日により異なる問題

「空欄」…割り当てなし

	【2】、【9】	【5】、【8】	【3】、【6】	【4】、【7】
恵那市教育委員会	2.0 / 4	2.1 / 4	2.3 / 4	2.4 / 4
岐阜県（公立）	2.1 / 4	2.0 / 4	2.4 / 4	2.5 / 4
全国（公立）	2.0 / 4	1.9 / 4	2.3 / 4	2.3 / 4

IRTスコア集計値

	平均IRTスコア	標準偏差	パーセンタイル値				
			10%	25%	50%	75%	90%
恵那市教育委員会	509	116.8	369	437	500	565	657
岐阜県（公立）	526	131.4	374	441	514	596	679
全国（公立）	503	124.0	361	422	495	572	652

※IRT スコアとは、推定された能力値を分かりやすく示すものです。各設問の正誤パターンから学力を推定し、500 を標準とした得点で表しています。

文部科学省　令和７年度全国学力・学習状況調査　「中学校理科」　結果返却のポイントより

■　調査結果の概要

理科において恵那市では、IRT スコアが県より 17 ポイント下回っているものの全国より６ポイント上回っています。また、標準偏差が県より 14.6 ポイント、全国より 7.2 ポイント下回っていることからデータのばらつきの差が小さい、つまり、平均値付近にデータが集まっており、学力差が小さいことが分かります。

指導改善のポイント

■　課題の見られた問題について

課題の見られた問題の概要

3（1）　恵那市の平均正答率 **20.8%**（全国：34.9%）

「エネルギー」を柱とする領域　思考・判断・表現

仮説を立てて科学的に探究する学習場面において、電気回路に関する知識及び技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想することができるかどうかをみる

【仮説】

図１の回路で実験を行ったとき、

回路の中の湿度センサーには、オームの法則が成り立つ。

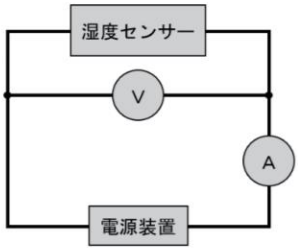


図１

（1）

【仮説】が正しい場合、どのような結果が得られればよいか、最も適切なものを**1つ**選びなさい。

○

電圧の大きさ（V）	0.5	1.0	1.5
電流の大きさ（mA）	1.0	1.5	2.0

○

電圧の大きさ（V）	0.5	1.0	1.5
電流の大きさ（mA）	0.5	1.0	1.5

○

電圧の大きさ（V）	0.5	1.0	1.5
電流の大きさ（mA）	1.5	1.5	1.5

○

電圧の大きさ（V）	0.5	1.0	1.5
電流の大きさ（mA）	3.0	1.5	1.0

☞設問の詳細はこちらでご確認ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/pdf/25mondai_chuu_rika.pdf

問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
3	(1)	1	電流の大きさが 1.0、1.5、2.0 の表を解答しているもの		60.4	40.4	37.6
		2	電流の大きさが 0.5、1.0、1.5 の表を解答しているもの	◎	20.8	36.6	34.9
		3	電流の大きさが 1.5、1.5、1.5 の表を解答しているもの		10.4	14.2	15.6
		4	電流の大きさが 3.0、1.5、1.0 の表を解答しているもの		8.3	8.6	11.7
		99	上記以外の解答		0.0	0.0	0.0
		0	無解答		0.0	0.1	0.2

■ 解答の傾向について

実施日により異なる問題の中で「エネルギー」を柱とする領域から出題された正答率が20.8%である3（１）は、全国平均との差が 14.1 ポイント、県平均との差が 15.8 ポイントで、本市と全国、県との平均の差が最も大きい問題です。

設定した【仮説】が正しい場合の実験結果の予想を選択する問題です。この内容は、中学校２年生で学習する「電気の世界」の単元に位置付けられます。ここでは、実験を通して電圧と電流の関係を調べる中で、「オームの法則」として電圧と電流、抵抗の関係をまとめ、直列回路や並列回路における抵抗の大きさを求める学習をしています。

恵那市の生徒が選んだ解答を分析してみると、電圧の大きさ（V）が 0.5、1.0、1.5 と増加するにつれて、電流の大きさ（mA）も 1.0、1.5、2.0 と増加する１次関数の関係に

なっている解答類型１を選んだ生徒が 60.4 ポイントと、県や全国より 20 ポイント多いことが分かります。これは、「オームの法則」による電流と電圧の関係がどのような関係になるのか、理解できていないことが要因であると考えられます。

■ 学習指導に当たって

オームの法則を学習する授業で大切にしたいことは、単に「電圧＝抵抗×電流」という公式を覚えさせるのではなく、その関係が成り立つ意味や背景を理解させることです。まず、生徒たちが回路図を正しく読み取り、電流や電圧を測定する基本的な技能を身に付けることが出発点となります。その上で、実際に電圧を変えながら電流を測定し、数値を表やグラフに整理する活動を通して、比例の関係に気付かせることが重要です。こうした「体験を伴う気付き」が、単なる暗記に終わらない理解を支えます。

また、今回の問題では、選択肢の中で、「解答類型１が比例の関係である」と勘違いした生徒がいることが予想されます。電圧の大きさが２倍、３倍になると電流の大きさも２倍、３倍になっているか。または、抵抗（電圧/電流）が、いつでも一定になっているのはどれかといった、算数や数学で学習する「比例の関係」がどのような関係かをこの学習の中でも、抑え直すことも大切です。

指導改善のポイント

■ 課題の見られた問題について

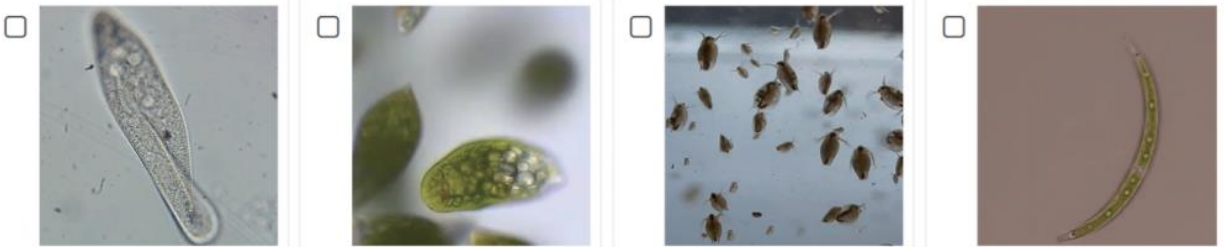
課題の見られた問題の概要

1（４）恵那市の平均正答率 **26.1%**（全国：29.7%）

「生命」を柱とする領域　知識・技能

水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる

呼吸を行う生物を**すべて**選びなさい。なお、生物１から４のすべてを選んでもかまいません。



問題番号		類型	解答	正答	恵那市	県	全国
1	(4)	1	生物１、生物２、生物３、 生物１・生物２、生物１・生物３、生物２・生物３、 生物１・生物２・生物３　と解答しているもの		60.2	58.3	58.9
		2	生物４　と解答しているもの		0.0	0.4	0.6
		3	生物２・生物４と解答しているもの		3.4	2.2	2.2
		4	生物１・生物２・生物３・生物４　と解答しているもの	◎	26.1	30.6	29.7
		99	上記以外の解答		10.3	8.4	8.3
		0	無解答		0.0	0.1	0.2

■ 解答の傾向について

全日程に共通する問題の中で「生命」を柱とする領域から出題された正答率が 26.1 ポイントである1（４）は、全国平均との差が 3.6 ポイント、県平均との差が 4.5 ポイントで、今回の全日程に共通する問題の中で最も正答率が低い問題です。

生物１から生物４までの動画を見て、呼吸を行う生物をすべて選ぶ問題です。誤答として解答類型１が 60.2%と最も多く、動画を見て、動いている生物が呼吸を行うと考えている生徒が多くいることが要因であると考えられます。

■ 学習指導に当たって

中学校２年生の「生物と細胞」の中で、池などの水中にすむプランクトンについて学習します。授業では、実際に池などの水を準備し、顕微鏡を使って水の中に生きるプランクトンを観察することで、多細胞生物や単細胞生物について学びます。

この際、大切にしたいことは、いろいろな生物を比較して見いだした共通点や相違点を基に、生物を分類するということです。この単元では、プランクトンを分類しますが、植物に近い特徴をもった生物と動物に近い特徴をもった生物に分類したり、多細胞生物や単細胞生物に分類したりすることができます。多細胞生物と単細胞生物の分類について、それぞれの特徴となる相違点をイラストや図などでまとめながら、共通点として、呼吸（細胞の呼吸）についてまとめるようにしましょう。

最後に、こうした知識・技能の定着には、反復学習が必要となります。ドリルパークを使用するなど、自分に合った家庭学習を実施できるよう生徒へ働きかけをしていくようにしましょう。

〈主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「５年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童の割合は 65.3%となっています。これは全国平均と比べて 3.3 ポイント、県平均と比べて１ポイント下回っていますが、ほぼ平均並みを維持しています。（３１）

・「５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童の割合は 77.9%となっています。これは全国平均と比べて 2.4 ポイント、県平均と比べて 3.8 ポイント下回っていますが、ほぼ平均並みを維持しています。（３２）

・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童の割合は 79%になっています。これは全国平均と比べて 5.5 ポイント、県平均と比べて 6.1 ポイント下回っています。ただし「当てはまらない」と回答する割合は全国や県の平均よりも低くなっています。（３５）

【中学校】

・「１、２年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」という質問に、「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」という回答している生徒の割合は 66.8%となっています。これは全国平均と比べて 3.8 ポイント、県平均と比べて 0.8 ポイント上回っています。（３１）

・「１、２年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問に「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答している生徒の割合は 84.1%となっています。これは全国平均と比べて 6.4 ポイント上回り、県平均同じ値となっています。（３２）

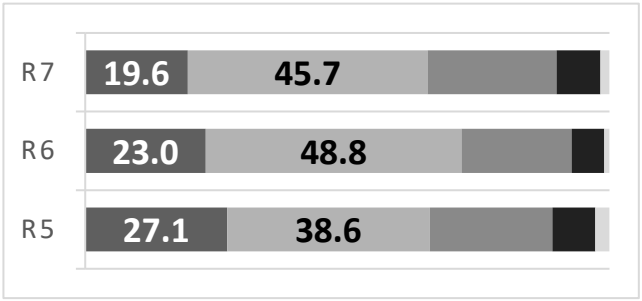
・「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていると思いますか」という質問に「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答している生徒は 86.6%となっています。これは全国平均と比べて 1.9 ポイント上回っていますが、県平均と比べて 1.3 ポイント下回っています。（３５）

〇経年変化の様子から、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、成果を上げつつあるといえます。特に小学校のころは主体的・対話的な学び方について「できている」とは自信をもてなかったが、継続して取り組むことによって中学校になって「できている」と実感するまでに至っている傾向があります。

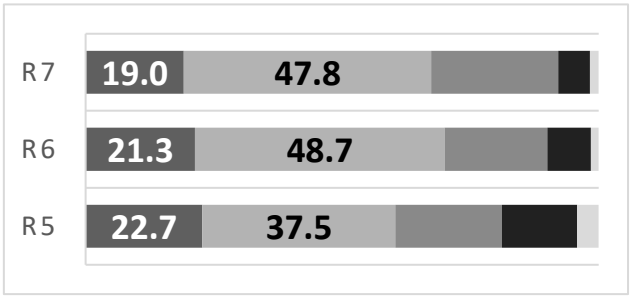
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	３１	５年生まで〔１，２年生のとき〕に受けた授業で，自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組立てなどを工夫して発表していましたか
中	３１	

【小学校】

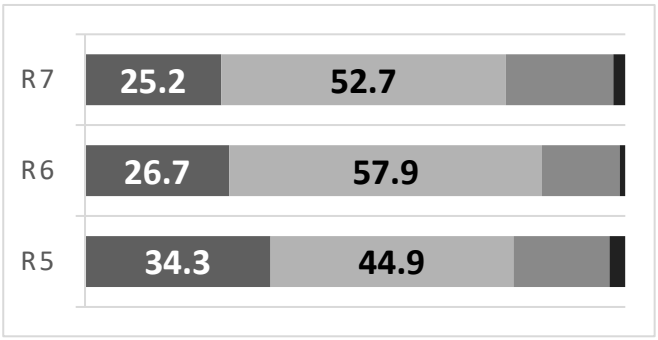


【中学校】

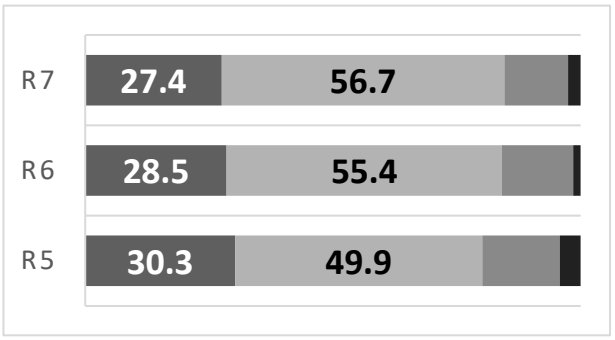


	質問番号	質問事項
小	３２	５年生まで〔１，２年生のとき〕に受けた授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいましたか
中	３２	

【小学校】

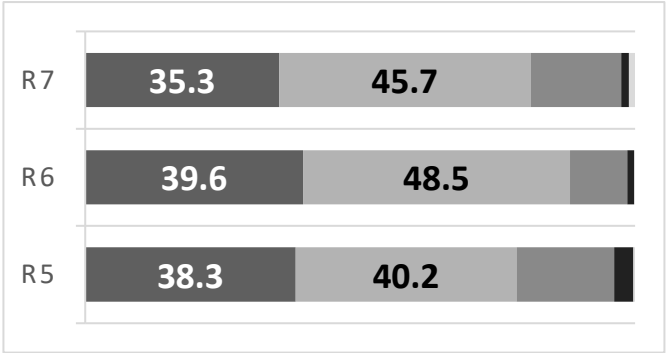


【中学校】

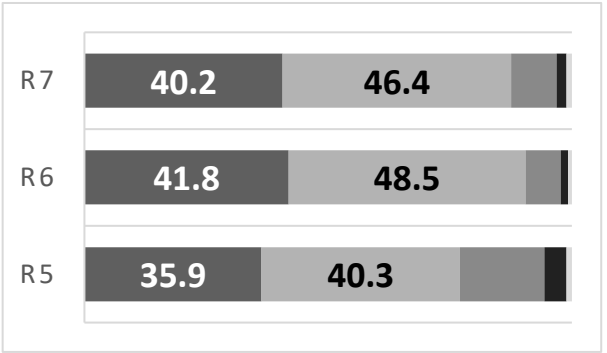


	質問番号	質問事項
小	３５	学級の友達と〔生徒〕の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，新たな考え方に気付いたりすることができていますか
中	３５	

【小学校】



【中学校】



〈個別最適な学びの視点からの授業改善に関する取組状況〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「５年生までに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 84.37%となっています。これは全国平均と比べて 0.9 ポイント上回り、県平均と比べて 0.7 ポイント下回っています。（３４）

・「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 73.9%になっています。これは全国平均と比べて 5.5 ポイント、県平均と比べて 5.8 ポイント下回っています。（３４）

・「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 89.4%になっています。これは全国平均と比べて 2 ポイント、県平均と比べて 2.4 ポイント上回っています。（３８）

【中学校】

・「１、２年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 87.5%となっています。これは全国平均と比べて 8.2 ポイント、県平均と比べて 5.1 ポイント上回っています。（３４）

・「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 78.5%になっています。これは全国平均と比べて 5.1 ポイント、県平均と比べて 1.4 ポイント上回っています。（３６）

・「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している生徒の割合は 90.5%になっています。これは、全国平均と比べて 6.7 ポイント、県平均と比べて 3.2 ポイント上回っています。（３８）

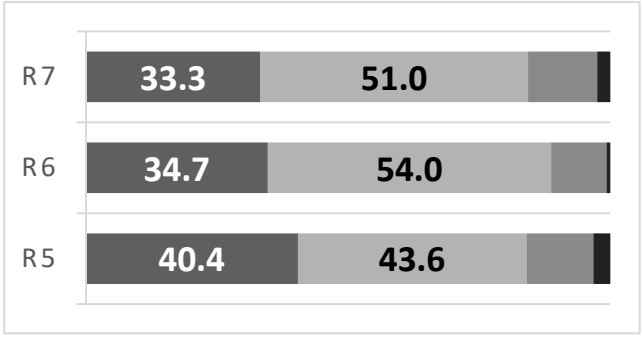
〇教師による追究場面での「個に応じた学び」の提供、まとめの場面で「自分は、どのような学び方をして、何ができるようになったか（できるようになっていないか）」を振り返り、以降の授業につなげる場の位置付けや働きかけが定着してきているといえます。特に小学校のころは「できている」とは自信をもてなかったが、継続して取り組むことによって中学校になって「できている」と実感するまでに至っている傾向があります。

〇先生方が授業で分からなかった内容やテストで間違えた問題について、分かるまで丁寧に寄り添う姿勢が成果となって表れています。

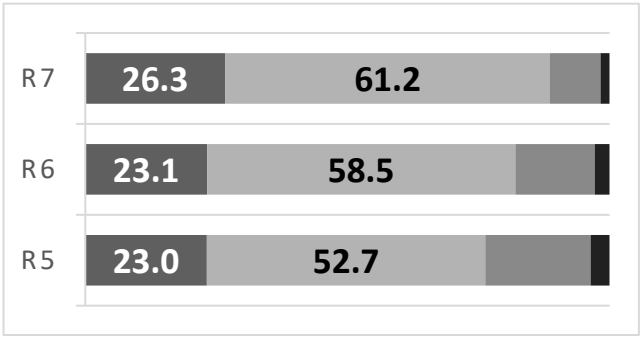
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	３４	５年生までに（１、２年生のときに）受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか
中	３４	

【小学校】

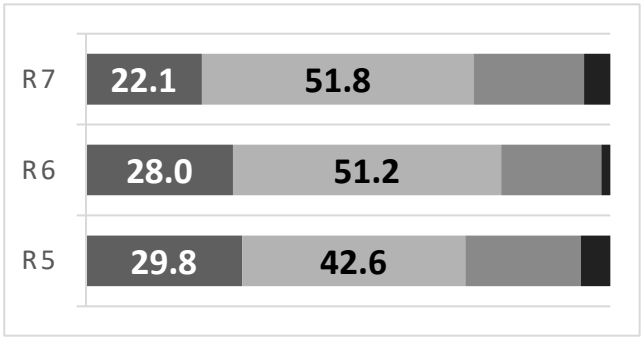


【中学校】

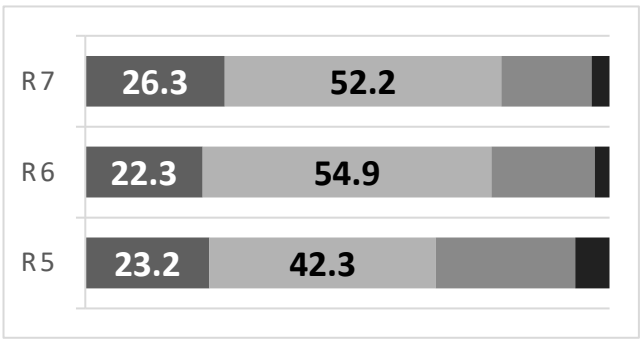


	質問番号	質問事項
小	３６	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか
中	３６	

【小学校】

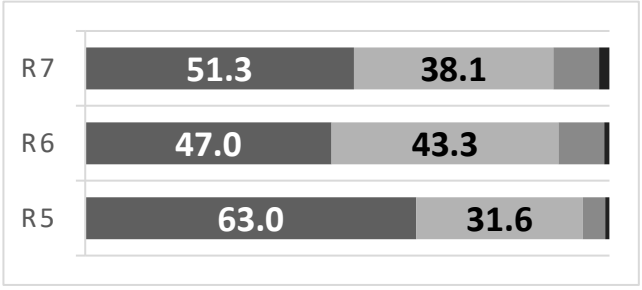


【中学校】

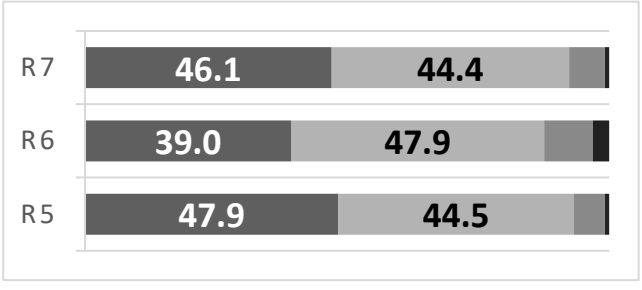


	質問番号	質問事項
小	３８	先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか
中	３８	

【小学校】



【中学校】



〈自己有用感〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「自分には、よいところがあると思いますか」という質問に対し、今年度は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 86.6%となっています。全国平均と比べて 0.3 ポイント低い状況ですが、県平均と同じ値となっています。（5）

・「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対し、今年度は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 92.7 となっています。これは全国平均と比べて 0.5 ポイント、県平均と比べて 0.7 ポイント高くなっています。（6）

【中学校】

・「自分には、よいところがあると思いますか」という質問に対し、今年度は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 87.2%になっています。これは、全国平均と比べて 0.6 ポイント高くなっていますが、県平均と比べて 0.4 ポイント低くなっています。（9）

・「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対し、今年度は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 92.7%になっています。これは全国平均と比べて 0.5 ポイント上回っていますが、県平均と比べると 1.8 ポイント下回っています。（6）

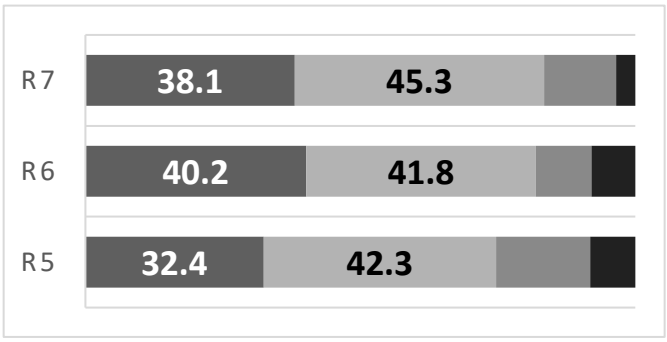
※児童生徒の自己有用感は平均並みの水準を維持しています。

〇教師による肯定的な働きかけは年々増加しており、全校体制で日常的に取り組まれていることが要因として挙げられます。

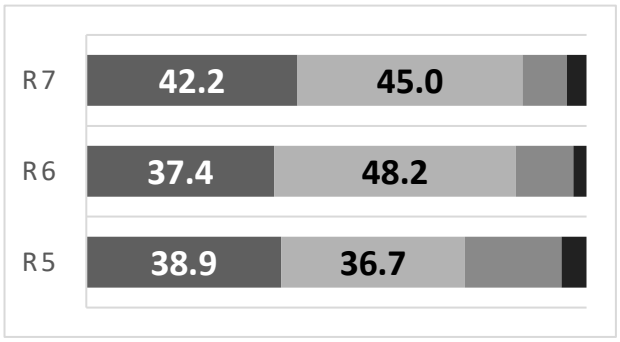
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	5	自分には，よいところがあると思いますか
中	5	

【小学校】

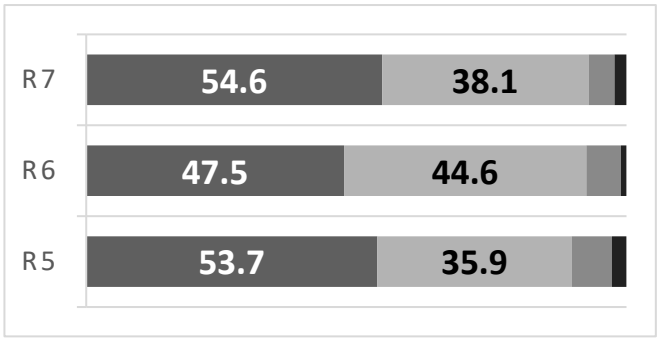


【中学校】

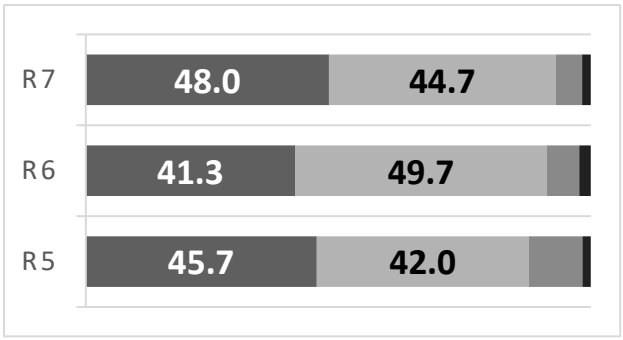


	質問番号	質問事項
小	6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか
中	6	

【小学校】



【中学校】



〈「社会性」等に関わる状況〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「人が困っているときは、進んで助けていますか」という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童の割合は 93.6%になっています。これは、全国平均と比較して 0.1 ポイント、県平均と比較しても 0.9 ポイント低くなっていますが、ほぼ平均並みを維持しています。（８）

・「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童の割合は 98.6%になっています。これは全国平均と比較して 1.4 ポイント、県平均と比較して 0.6 ポイント高くなっています。95%以上の高い水準を維持していますが「当てはまる」の割合が減少している点が課題となっています。（９）

【中学校】

・「人が困っているときは、進んで助けていますか」という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している生徒の割合は 93.3%となっています。これは、全国平均と比較して 2.4 ポイント、県平均と比較すると 0.9 ポイント上回っています。（８）

・「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している生徒の割合は 96.7%となっています。これは、全国平均と比較して 0.8 ポイント上回っていますが、県平均と比較して 0.4 ポイント下回っています。しかし 95%以上の高い水準を維持しています。（１３）

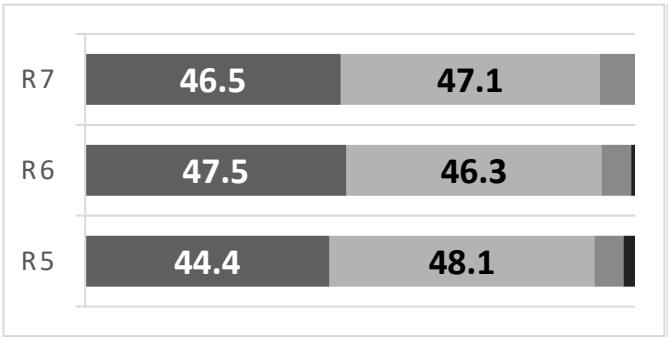
○児童生徒の社会性は高い水準で育まれているといえます。これまでの取組で「困っている人を助ける」という「かかわり」の行動に自信をもっている児童生徒が増えてきています。

●「いじめをしてはいけない」という「配慮」に対して、中学生では「どんな理由があってもいけない」という強い認識が維持されているのに対して、小学生では「理由があれば、仕方がない場合もある」という認識をもっていることが想像されます。トラブル対応の際に双方の思いや考えに寄り添うことは大切にしつつ、「理由があれば許されるというものではない」ということが明確に伝わる取組を工夫する必要があるといえます。

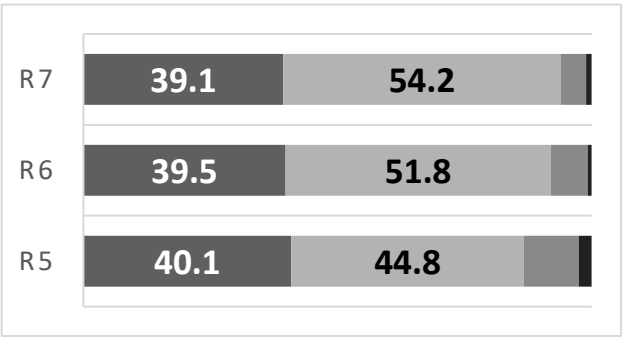
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	8	人が困っているときは、進んで助けていますか
中	8	

【小学校】

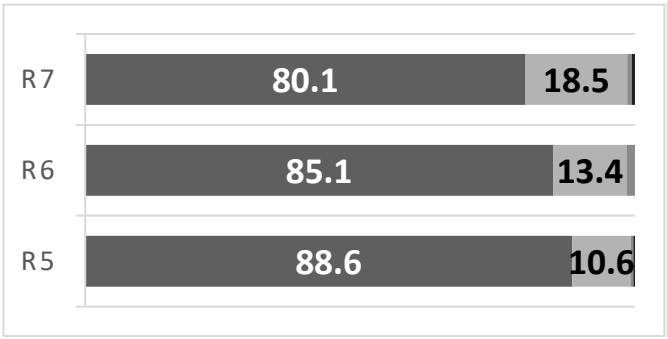


【中学校】

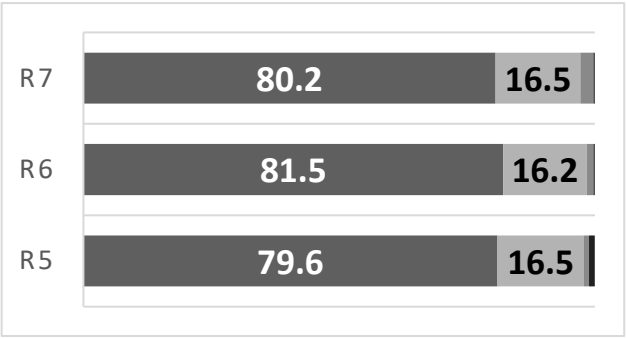


	質問番号	質問事項
小	9	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか
中	9	

【小学校】



【中学校】



〈「郷土愛」等に関わる状況〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は、75.9％になっています。これは、全国平均と比較して 5.4 ポイント、県平均と比較して 5.9 ポイント下回っています。（２７）

【中学校】

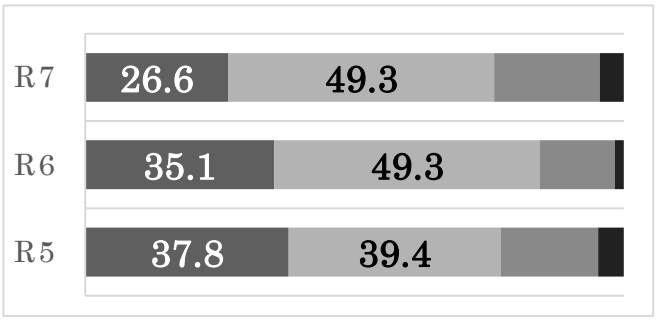
・「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は、75.7%になっています。これは、全国平均と比較して 0.4 ポイント上回り、県平均と比較して 0.5 ポイント下回っています。年々増加傾向にあり、ほぼ平均並みの割合になっています。（２７）

●小・中学校で取り組んでいる「ふるさと学習」により児童生徒の恵那市（もしくは自分たちの地域）に対する愛着は育まれていると考えられます。しかし、「具体的に自分で何かしてみたい」もしくは「自分たちにも何かできるはず」という思いが課題となっています。この要因として「ふるさと学習」では低学年では「地域を知る」もしくは「地域の人と関わる」機会が多いのに対して、中学校になるに従い「地域の課題について考える」「具体的に取り組む」といった機会が多くなる学校が多いことが考えられます。発達段階を考慮しながらも、その学年段階に応じた「地域への働きかけ」「地域への貢献」の取組を工夫する必要があるといえます。

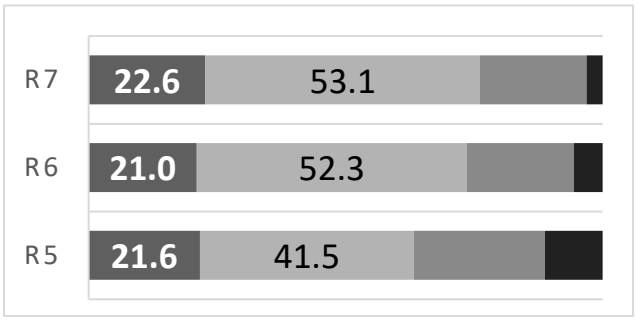
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	２７	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか
中	２７	

【小学校】



【中学校】



〈「主体性」等に関わる状況〉

［児童生徒質問紙の結果より］

【小学校】

・「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は、76.5%となっています。これは、全国平均と比較して 6.6 ポイント、県平均と比較して 5.4 ポイント下回っています。（7）

・「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童の割合は 95.8%となっています。これは、全国平均と比較して 0.6 ポイント、県平均と比較して 0.5 ポイント下回っていますが、95%以上の高い水準を維持しています。（１５）

【中学校】

・「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は、64.8%となっています。これは、全国平均と比較して 2.7 ポイント、県平均と比較して 3.4 ポイント下回っています。（7）

・「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合は 96.6%となっています これは、全国平均と同じ値であり、県平均と比較して 0.4 ポイント下回っていますが、95%以上の高い水準を維持しています。（１１）

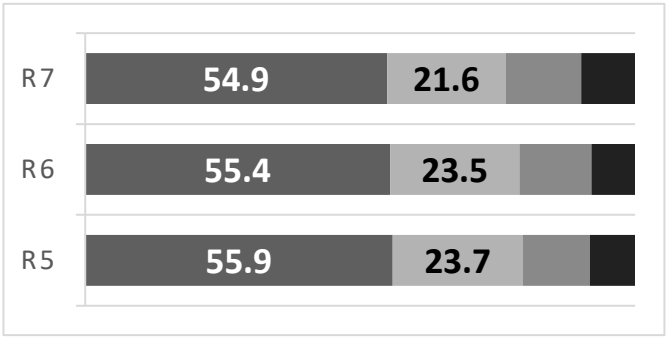
○児童生徒の主体性は向上傾向にあるといえます。特に「人の役に立つ人間になりたい」という心情は小・中学校共に肯定的な回答が 95%以上と高い水準を維持しています。これは恵那市が取り組んでいる志教育の成果と考えられます。

●「将来の夢や目標」については小・中学校共に伸び悩んでいます。自分の適性や実現可能性にとらわれにくい、低学年のうちから夢や目標を語り合う機会を工夫する必要があるといえます。

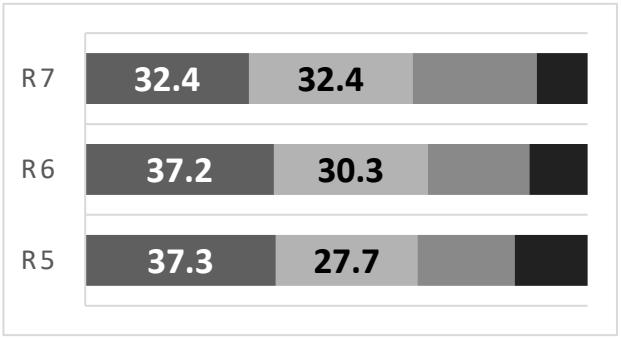
■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答

	質問番号	質問事項
小	7	将来の夢や目標を持っていますか
中	7	

【小学校】

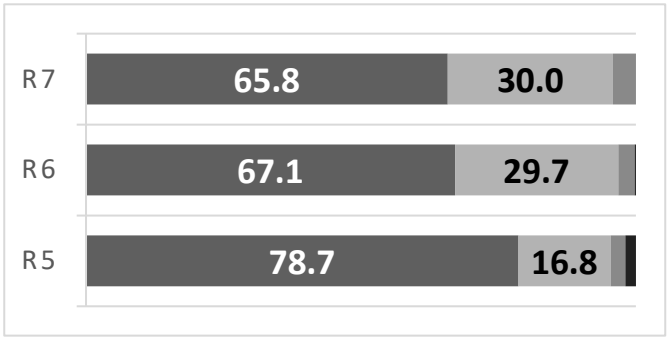


【中学校】

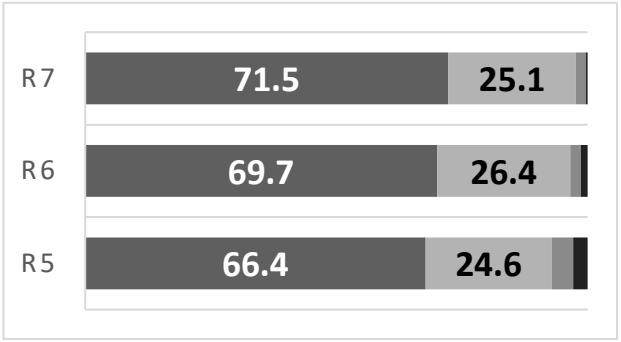


	質問番号	質問事項
小	１１	人の役に立つ人間になりたいと思いますか
中	１１	

【小学校】



【中学校】



〈ＩＣＴを活用した学習状況〉

［児童生徒質問紙の結果より

【小学校】

・「５年生までに受けた授業で、コンピュータなどのＩＣＴをどの程度使用しましたか」という質問に対し、「ほぼ毎日」と回答している児童の割合は 73.9%となっています。これは、全国平均と比較して 27.2 ポイント、県平均と比較して 16 ポイント上回り、高い水準を維持しています。（２８）

【中学校】

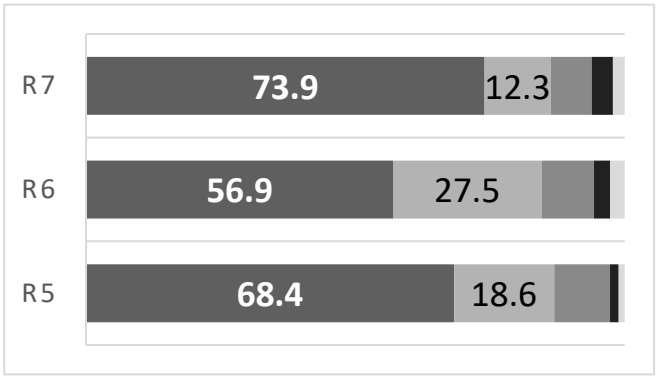
・「１、２年生のときに受けた授業で、コンピュータなどのＩＣＴをどの程度使用しましたか」という質問に対し、「ほぼ毎日」と回答している生徒の割合は、93.1%となっています。これは、全国平均と比較して 39.9 ポイント、県平均と比較して 20 ポイント上回り、高い水準を維持しています。（２８）

○ICT を活用した学習状況は、小学校・中学校ともに高い使用率を維持しています。全国や県の ICT 活用が進んだため、恵那市との差が小さくなっています。

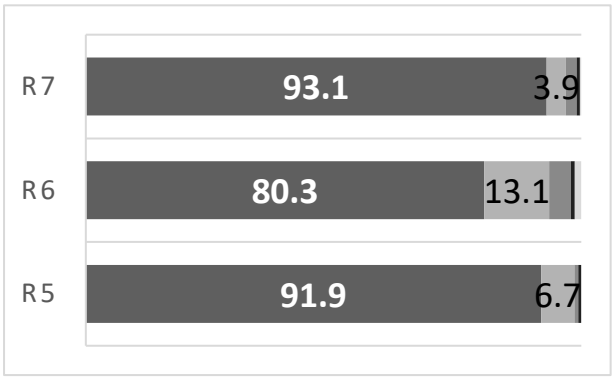
※今後は「恵那市立小中学校ＩＣＴ活用推進方針」にある、日常的な ICT の活用を通して「主体的に学ぶ児童生徒（自立した学習者)」を育成するための授業改善や、自分の学習状況に応じて学習内容の「定着」や「発展」につながる家庭学習を充実させるための取組をさらに工夫していく必要があります。

	質問番号	質問事項
小	２８	５年生まで〔１、２年生のとき〕に受けた授業で、コンピュータなどのＩＣＴをどの程度使用しましたか。
中	２８	

【小学校】



【中学校】



令和７年度調査では「ほぼ毎日」を「１日に複数の授業で活用」と「１日に１回くらいの授業」の２つに分けて質問しています。今回の分析では経年比較のため、合わせた数値で集計しています。

■当てはまる　■どちらかといえば、当てはまる　■どちらかといえば、当てはまらない
■当てはまらない　■その他　■無回答